

第3回 車座・交流会 in 石巻

第3回車座・交流会で訪れた石巻市は極めて多くの方が亡くなられ、市の商店街まで津波被害を受けたが、各機関と市民が連携し、またオープンに窓を開くことによって、内外の幅広いボランティア支援を得たことは周知の通りである。2011年秋より、他の地域に先駆けて長期復興に歩を進め始めた。今回はこの石巻市の復興施策のありかたや、まだまだ山積する課題について、女性の視点と感性を中心に議論し、具体策を見つめるべく、総勢53名が参加した。

【日時】2012年4月13日(金)～14日(土)

【場所】宮城県石巻市

【参加者】石巻市、宮城県、福島県を中心に被災地で活動している現地リーダー 28人、首都圏から参加したエキスパート 25人

【日程】4月13日

10時	仙台駅集合
12時半	石巻合同庁舎到着 復興地リーダーたちと合流
14時	被災現場の訪問 1. 大森仮設住宅 2. ふゆみずたんぼ(渡波) 3. 石巻漁港 4. (株)石巻精機製作所 5. 中央商店街
17時半	意見交換会会場(SOUL TO SOUL)到着 夕食、復興地リーダーたちからの メッセージ+意見交換会
22時	おしか家族旅行村オートキャンプ場到着

首都圏、関西、福島、宮城からのメンバーが仙台駅に集合。一行は愛子観光の大型バスで石巻へ。参加者たちの自己紹介ののち、まちづくりNPO げんき宮城研究所事務局長の門間光紀さんのガイドで、車窓から被災現場を眺めつつ、津波被害の生々しいお話を伺う。10mの津波で壊滅的な被害を受けた東松島市の東名～野蒜。今はただ荒地が広がる。全くニュースにならなかったのは、新聞社の支局がなかったから。大きく報道される町がある傍らで、支援の手が遅れ、全滅してしまった小規模な集落がたくさんあるという。バスに揺られること2時間あまり。石巻合同庁舎で、石巻のリーダーたちと合流し、今回の車座・交流会 in 石巻プロジェクトが始動！「東京目線ではなく、東北目線で。復興が達成されるまで、皆で一緒に頑張りましょう！」と、実行委員でNPO 法人女子教育奨励会(JKSK)理事長・木全ミツ氏。続いて、熱い想いが溢れるリーダーたちの自己紹介。「車座・交流会はすごい力を秘めている」「いわきで火を付けられて自分が変わった」など、



前回の参加者からのエールも。今回の石巻のキーパーソンである、東日本大震災圏域創生NPO センター代表・高橋信行さん、事務局長・太田美智子さんから、「元気で明るく朗らかな」避難所づくりに奔走されたご苦労や、思いをお話いただく。一行はバスで、太田さん、高橋さんのガイドのもと被災現場を訪れる。まずは、450世帯が暮らす大森仮設住宅へ。太田さんはご家族とこちらで生活されている。仮設では、友達ができない、真の交流ができない、そして見通しができな

いことで、ネタミが多くなる、などの難しい心の問題があるという。

続いて、NPO 法人たんぼ理事長の岩渕成紀さんに、ふゆみずたんぼのお話をお伺いしつつ、車窓からふゆみずたんぼを望む。ふゆみずたんぼとは、冬のたんぼに水を張り、たんぼの生きものの力を利用して、米作りを行う農法のこと、昭和 40 年代までは日本でも主流だった。海水をかぶった水田は、脱塩のために水を入れておいたほうがいいとのこと。岩渕さんは、自然界がもともと持っている力を利用して、たんぼを復元させる活動を行っている。

その後に訪れたのは、株式会社石巻精機製作所。従業員およそ 100 名、「機械のお医者さん」として、製紙機器等の製作・メンテナンスを担う会社だ。こちらは、従業員をひとりも解雇しないという経営方針で、復興への取り組みが経営のモデルケースとしても知られている。代表取締役社長の松本賢さんのお話を聞く。機械はすべて冠水し、事業所はがれきの山に埋もれ、そのなかには流れ着いた遺体もあったという。そのようななか、「会社はこの場所で必ず再建する」というメッセージをいち早く発信した。多くの優良顧客企業がこの地での復興の意思をいち早く表明したことが「必要とされている」という力になったという。



続いて、日本有数の石巻漁港へ。石巻魚市場(株)常務取締役の及川耕吉さんにお話を聞く。津波で甚大な被害を受け、一日の水揚量は以前の 2000 トンが、現在は 400 トン以下に。及川さんたちの今の課題は、放射能検査の実施。4 月 1 日から、国の食品の放射能基準値が 1 キロあたり 500 ベクレルから、国際的にも厳しいといわれる 100 ベクレルに引き下げられ、対応に追われている。参加者から「こんな状況に追いやった原発についてどう思うか？」との質問に対し、「自分たちがやれることを精一杯やるだけ」と及川さん。「抗議の声を上げていくべきでは？」とのさらなる問いかけがされたその時、その場に一瞬緊張が走った。「声を上げるのは首都圏の人間ではないか？彼らに求めるのはおかしい」という別の参加者。このやりとりは、今回の交流会にとって重要な投げかけとなり、その後テーマとして議論されることになる。



見学の最後に訪れたのは、石巻市の中心部の、アイトピア商店街にある「かめ七呉服店」。店主の米倉さんご夫婦は、町の復興に尽力されており、商店街のなかで、このお店は人のメッカ、コミュニティの中心となっている。商店街振興組合理事長の正岡賢司さんは、「震災後これまで、いろいろな人に助けられた。マイナスのことばかりで、後ろを見ればきりが無いが、少しでも前に進む。いま 63 歳だが 10 歳若いつもりでがんばる」と、強く語る。

あたりが薄暗くなりかけたころ、意見交換会会場の「SOUL TO SOUL」に到着。夕食後は、石巻を中心に活躍する復興地リーダーたちの活動報告を聞く。「男性も女性もちよっと晴れやかな気分になるパーティー」「手仕事で元気になってもらう新聞バッグづくり」「酒造りを通じた子供支援『未来へのバトン』」「オレンジ色の商品購入で復興地を支援するしくみ」「抱っこすることで心を癒すお地藏さん」「子どもたちの遊び場・居場所づくり」「保育所の復旧・

運営支援」などなど、あたたかく力強い取り組みの数々。第一歩を踏み出した復興地リーダーたちの熱意を肌で感じるリレートークだった。

その後、一行はバスでおしか家族旅行村オートキャンプ場へと向かう。現在石巻は工事関係者らでどこの宿泊場も満杯状態だ。震災の影響で休館していた

ところを、車座・交流会参加者の紹介により、特別に利用させていただけることになった。

【2日目午前：車座・交流会】

9時	金華山・黄金山神社にてお参り
12時	車座・交流会場（SOUL TO SOUL） 昼食、車座
16時	復興地リーダー解散、石巻出発
18時	仙台駅着、最終解散

翌日は朝8時半に出発。NPO法人キャンパー代表理事の飯田芳幸さんの案内のもと、一行は海上タクシーで石巻の沖合に浮かぶ島、金華山へと渡る。東北三大霊山のひとつ金華山は、島全体が黄金山神社の神域である。商業地や住宅地等とは違い、なかなか支援の手が入らず、震災直後の津波被害の様子が、生々しく残されている。2011年秋の台風15号や4月の爆弾低気圧の被害も大

きかった。一同は、復興を祈願する正式参拝を行った。「これまで金華山と黄金山神社は、火事で全焼するなど数々の災難に見舞われながらも、何度もよみがえってきた。今回も同じ。2013年の巳歳御縁年大祭に向けて、修復作業を進めている」。神社職員のかたは、復興に向けた決意を語られた。

正午前に車座・交流会会場に到着。地元石巻のリーダーがさらに数名加わって、会場はいつそう活気づく。いよいよ、交流会開始。前夜の活動報告から、石巻が抱える課題・復興への提案となる6つのテーマを抽出、テーマごとに数人ずつに分かれ、課題解決のために何をすべきか具体的に考えるワークショップを行った。石巻にちなんだチーム名が付けられた。各チームのテーブルでは、首都圏リーダーのひとりがファシリテーター、地元リーダーのひとりがキーパーソンとなり、皆でそれぞれのテーマについて、ビジョン、課題、アクションプランをまとめる。第一回のワークショップののち、ファシリテーターと地元のキーパーソンを残し、参加者が入れ替わっての2回目のワークショップ。メンバーが変わるとまた違う視点が生まれ、議論が深まる。

3時間近い議論の末、各チームがビジョンとアクションプランを発表。発表趣旨は以下の通り。

6つのテーマとビジョン・アクションプラン

●クロマツチーム「復興地からの発信・提言を首都圏はどうサポートするか」

復興地からの発信にあたり、まずは自分たちが自立することが重要。そのうえで、石巻日々新聞が読売新聞等の全国紙と提携し、全国に記事を紹介してもらう。平井さん、伊東さん、藤間さんを中心に記事を執筆予定。全国紙とのつながりは木全さんらが担当。

●しかチーム「子どもたちへのよりよいケアのために」

子どもの自立を育み、子供が主体となって全年齢の人たちがかかわる場作りを行い、大人のひきこもり防止も同時に図る。まずは、どの大人がどこにいてどんなことができるのかをまとめた支援サポーターリストを作成。次に、ホームページやFacebookを利用して情報発信。企業に資金援助を依頼したい。



●カキチーム「水産業を活かしたコミュニティづくり」

プロジェクト名は”海彦山彦物語”。従来の複雑で誰ももうからない流通プロセスを刷新して、消費者に直接新鮮な魚介類を届けるしくみを広めていきたい。おいしい魚介の食べ方、くさらない水やわかめ等の特産についても積極的に発信していく。

●いなほチーム「山、川、たんぼ、里山、里海のスマートビレッジ作り」

村人ひとりひとりが村の魅力づくりに貢献できる村人参加型のヴィレッジを 50 年くらいのスパンで実現したい。自然エネルギーを利用する自給自足型の、外の人も入りやすい未来のコミュニティをつくりたい。実際の候補地はすでにあり、実現に向けて企画を進めていく。

●ツツジチーム「商品企画『未来へのバトン』」

行政・市民・企業が連携する石巻モデルとして、新しい made in Japan、made in 石巻を創造、発信したい。まずは、コア探索として、地域の名人や知恵など石巻のいいところを探す。販路の確立は、県人会に呼びかけるなど共感者を広げる形で。

●クジラチーム「被災の経験をどう活かすか？」

コミュニケーションのとれる顔の見えるコミュニティ(居場所)を小学校単位等でつくり、皆で助け合う防災に強い地域づくりを進める。また、語り部を育成し、首都圏の人々に体験を伝える学びの交流ツアーを企画・実施したい。

「私たちはイメージができることならば、実現に向けて行動することができる。今日から行動を起こしましょう。そしてこのイメージを今後さらに膨らませていきましょう」と、実行委員で(株)クレアン代表取締役の菌田綾子氏。復興地と首都圏が手に手を取り合って、これらのビジョンとアクションプランを、いかに具体化していくかがこれからの課題だ。「復興まで長いスパンを覚悟している。まずは、自分たちでできる範囲をつくって、そして皆さんにお手伝いをお願いします」と東日本大震災圏域創生 NPO センターの高橋さんは、復興への長い道のりを前に、決意を語った。

これにて、2 日間にわたる盛りだくさんのプログラムがすべて終了。
参加者それぞれが未来に向けた思いと決意を胸に、帰路に着いた。

